

(2) 部分

(1)

奈良県立橿原考古学研究所『八条遺跡』(二〇〇六年)

(坂 靖)

SEI三

(2)

合 四番

上々□□
丁数壺□也
□本間や庄右衛門殿

西丁
清二郎

1962×320×20 061

(1)は、上部に二本の刻線があり、その間の左右二カ所に釘孔がある。住所と名前が書かれており、町家の表札に使用されたものである可能性が高い。(2)は、スギの板材に大書したもので、数字と人名が記されている。井戸の築造と何らかの関係がある可能性がある。

なお、釈読にあたっては、天理大学の谷山正道氏のご教示を得た。

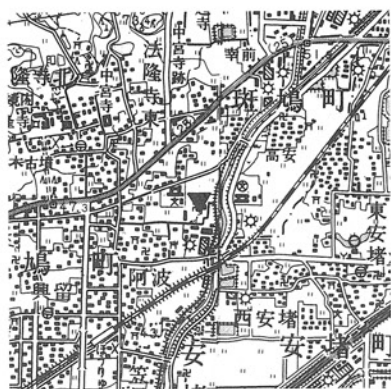
9 関係文献

奈良・上宮遺跡

かみや

- 1 所在地 奈良県生駒郡斑鳩町法隆寺南三丁目
- 2 調査期間 第一次調査 二〇〇一年(平13)三月
- 3 発掘機関 斑鳩町教育委員会
- 4 調査担当者 平田政彦
- 5 遺跡の種類 官衙跡・寺院跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代～江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

上宮遺跡は、法隆寺の南東約一・二kmの富雄川右岸の沖積地に立地している。一九九一年度の発掘調査における奈良時代的大型掘立



(大阪東南部・桜井)

柱建物群の検出と、平城宮・京所用瓦と同範の瓦の出土から、『続日本紀』に記載のある称徳天皇の行宮「飽波宮」である蓋然性が高いと考えられている。

一方、当遺跡内には、聖徳太子薨去の宮「飽波葦垣宮」の跡地に、嘉祥二年

(八四九)に実乗によって建立されたと伝わる成福寺が所在する。

今回の調査は、これまで未調査であった成福寺南域の遺構の広がりを確認することを目的とした遺跡範囲確認に伴うものである。

調査の結果、素掘りの溝三条のほか、溝二条、土坑一基などを検出したが、官衙関係の遺構は検出していない。

木簡は、成福寺境内をめぐる南側環濠にあたる幅2m以上(北側は未検出)の溝より一点出土した。木簡が出土した粘質土層の上層には、短期間で堆積したと考えられる一八世紀の近世陶磁器を包含する砂層が存在することから、それ以前に溝に落下または廃棄されたものと考えられる。

8 木簡の釈文・内容

(1) ・「寅余月十七日」(右側面)

・「。南門之鍵」(表面)

・「享保第十×」(左側面)

・「。成福×」(裏面)

92×32×19 061

南門の鍵札の木簡である。成福寺の南門の存在は確認できていないが、成福寺は東面する寺院であることから、南門は恐らく通用門であろう。側面には年紀が書かれており、享保一〇年代で寅年に該当するのは、享保一九年(一七三四)である。余月は一二月の異称。

なお、木簡の釈読と赤外線撮影にあたっては、奈良文化財研究所の渡辺見宏氏、山本崇氏、中村一郎氏のご協力を得た。

(平田政彦)

